

# 「PBLを柱としたキャリア教育システムの構築」第2報

## — 教育支援用資料作りと分析 —

山内 詮男\*\*稲永 善数\*\*\*森田英俊\*\*高比良秀彰\*\*志久修\*\* 城野祐生\*\*堂平良一\*\*高山能博\*\*  
大里浩文\*\*\*森保仁\*\*\*

### On the Installation of the Career System Which Focuses on PBL Education, 2nd Report Drawing up Supporting Data for Career System and a Consideration

Akio YAMAUCHI Yoshikazu INENAGA Hidetoshi MORITA Hideaki TAKAHIRA Osamu SHIKU  
Yuuki JOHNO Ryouichi DOUHIRA Hirofumi OSATO Yasuhito Mori Yoshihiro TAKAYAMA

#### 1. はじめに

すでに前報<sup>1)</sup>で報告したように、平成19年度の「現代的教育ニーズプログラム（キャリア教育）」（以下、現代GPと略す）に、テーマ「PBLを柱としたキャリア教育システムの構築」で採択された。本校では、キャリア教育支援ワーキンググループを上げた後、3年間の予定でキャリア教育システムの構築に取り組んできた。前報で述べたように、新規の様々な取組を計画、実行をしてきた。この報告では、学生支援と同時に学科長や担任等の指導者が円滑に業務を進行できる支援用の意味をも兼ねた資料作成への試みを報告する。まず、支援用の資料作成の目的と概要を述べた後、資料のデータを基にした簡単な分析的考察を報告する。

#### 2. キャリア教育支援用資料

##### 2.1 支援用資料作製の背景と目的

キャリア教育の目的や意義については、前報と重複するので、ここでは省略する。筆者がかって、本校物質工学科に在職した時期には、5年生の学級担任や学科長の任務が多かった。就職、進学という進路指導を数多く体験した。痛感させられた事は、進路を選択する際に学生が必要な情報を

入手可能な資料等が極めて少ないことであった。また、教員にとっても指導用の支援的な資料が不足しているので、学生が変わる度に、毎回毎回、同じ説明や情報伝達を繰り返せねばならず、徒労感にさいなまれていた。これらの労力を軽減できる様な有益な資料や材料を渴望していた。

その時の体験からは、

- ① 多くの学生は進路決定が遅く、直前になって慌てて、志望先を決めていたのが現状だった
- ② 所属学科の先輩の進路先の情報は得られても他学科の先輩のデータは不詳のままであった
- ③ 前年の短期のデータだけでなく、少なくとも5年間程度の長期の進路先データが必要だ

また、志望が決定した後も、

- ① 受験用の書類や履歴書の書き方等の、諸々のノウハウ全般が解らない、全く知らない
- ② 最も重要な「面接」についても、面接の流れや質問内容等をほとんど知らないままで面接の現地訓練を受け、効果は上がらなかった。学科の教職員の応援が有っても、ほぼ全員に手取り足取りの指導を余儀無くされるため、多大な時間と労力の浪費を強いられていた

平成19年、キャリア教育支援室の立上げの際に以下の様な数種の資料整備を計画した。

- ① 過去10年程度の本校卒業生の全進路先のデータを一覧できるような資料
- ② 学生一人一人がキャリア形成の意味や意義を理解し形成をする際に参考となり、受験の際には虎の巻としてノウハウを解説した冊子

\* 原稿受付 平成21年9月30日

\*\* 佐世保工業高等専門学校 キャリア教育支援室

\*\*\* 佐世保工業高等専門学校 一般科目

- ③ 本校にきた「求人票」の全データの閲覧が可能で所属学科の求人の有無や諸々のデータの検索が可能な情報取得手段が可能な資料  
各学科分のデータは、各々の学科独自で作製をされており、全校としての便利なデータや参考資料となるメディア  
例えば、電気工学科在籍の学生と制御工学科の学生にとってみれば、お互いの求人状況は参考になる部分が多く知りたいと考えられる  
これらの条件を満たせる様な総合的資料

## 2. 2 支援に必要な資料の種類と内容

### ① 過去12年間の進路先

平成19年度までの分は、卒業式当日に配布した卒業生名簿の冊子をベースにして、それぞれの個人データの中から氏名と住所を除いた上で収集した。データはEXCELファイルに処理して収納した。<sup>2)</sup>まず、過去11年間分の就職先、進学先のデータを「50音順別」と「卒業生が多い順」の2種に分けて整理を行った。

また、「卒業生が多い順」については、学科別についても整理をして見やすく配慮をした。

平成20年度は、教員用の冊子と各学級用の分を配布するだけに留まった。

しかしながら、今年度は新たに卒業した分のデータを追加して、過去12年間にグレードアップをした。また、印刷効果を上げるためにPDFファイル化を試みた。教員と4年生の全員に配布を計画しており、来年度の進路活動準備に備えたい。

また、卒業生の就職者と進学者数の統計を取って簡単な分析を試み、この報告の最後に添付した。

### ② 冊子「キャリアデザインへの第一歩」

前述のように、この冊子の前半部には、キャリア形成の手助けを容易に行えるような内容とした。後半部では、受験の準備作業、実行、その結果報告という過程での参考資料やノウハウを主に編集を行った。以下、概略内容を紹介しておく。

#### 前半部 ーキャリア形成編ー

キャリア形成の必要性と意義：学校長、企業サイド  
進路選択ー自己分析、人生設計、周囲の環境  
具体的な進路の選択の考え方やヒント

#### 後半部 ー実践編ー

書類の書き方と発送のやり方、特に履歴書  
服装等の選び方と準備作業  
面接の進行の流れ、対応の方法、態度や姿勢  
応募のやり方、受験後の対処法

企業側の情報収集と整理は高山、学内分は山内が担当し、提出書類の分は学生課教務係で担当した。まず、平成20年度では試作版<sup>3)</sup>を発行した。全教員、学生さらに外部評価委員等の批評や意見を求めた。試作版の印刷の仕上がりが悪かったので、印刷効果改善と内容の充実を共に目標として、A5からB5版の第1版<sup>4)</sup>を新たに作製しなおした。試作版は、本校学生を対象にしたが、この新版では、対象を拡大し全国高専生に広げてみた。本校教員には9月、本校の3、4年生には後期授業開始直後に配布する。

8月上旬に佐世保市「アルカス」で開催された、全国高専教育方法改善プロジェクトの研究集会会場で各高専の代表にも既に配布をしている。

### ③ 全求人票閲覧システム

前述の全求人データを閲覧可能なシステムが本校学生課で試行中であるが、詳細については別の機会に譲り、ここでは省略する。

## 3. 進路に関するデータの簡単な分析

以下、機械工学科を **M**、電気電子工学科を **E**、電子制御工学科を **S**、物質工学科を **C** と略す。

### 3. 1 就職 vs 進学

過去12年間の全卒業生の進路先のデータを整理を行い、文末に添付した図表の結果が得られた。

これらの表とグラフからは、

**全学科** 年度毎に多少の変動は見られるが  
ほぼ1:1の割合で推移している

**M科** ここまでは、景気の好転に歩調を合わせて就職を選択する学生が増加した。

しかし、この大不況では再度逆転の可能性が予想され、来年度の分析が不可欠だ。

**E科** 変動は多少有るものの就職する者が多数派なのが特長である。学科創設時から、

就職指導にしっかりと取り組んで来た成果が明確に現れている。

**S科** S63年の学科改組から短期間の間に、企業との連携を密にした成果とIT化の波の後押しも有効に作用し、比較的順調に就職先を確保している。年度によって、進学者数の大きな変動が特長でもある。

**C科** 近隣に化学やバイオ系の工場が非常に少ない事と、女子学生の割合が多い事で就職難の荒波をもろに受け易かった。やむをえずの進学をも含むので進学の割合が多いのが特徴的であり、伝統でもある。

### 3. 2 卒業生の進路

#### ① 就職

本校をこの12年間に卒業したのは、**2008名**。その中で、就職した企業は民間と公的機関を含めて「**418**」社である。

また、2名以上の複数のOBが就職した企業は、学科混合を含めて「**186社**」(44.7%)である。学科別に見ると、

	就職実績有	複数の実績有
全体	418社	186社(44.7%)
M科	150社	50社(33.3%)
E科	159社	52社(32.7%)
S科	155社	58社(37.4%)
C科	111社	37社(33.3%)

比較的若くて同じ学科の先輩が複数以上居る確率は、およそ**1/3**程度である。学科が違うOBにまで広げて見れば5割増の**45%**の確率である。

高専生は、先輩が居る企業を中心に企業選択をする傾向が裏付けられている。

卒業生が多い順の企業ランキング表には固有名詞を伴うので、この報告では記述を避けた。

概略としては、M、C科では人材派遣企業が上位にランクされたのに対して、E、S科はさほど上位には位置していない。就職氷河期の就職難の激しさを如実に示すと同時に、求人数の多いE、S科は有利に就職戦線を戦った来たことを実証している。

#### ② 進学

大学編入試験を大学全体で統一して実施している例は極めて少なく、学部や学科別に募集している。編入試験の日時も会場もバラバラなので、各募集の別にカウントしてみると、延べ、**59**学科(部、校)となる。異なる学科の分をその大学一校にまとめると全部で**40**校となりさほど多岐にはわたらない。また、高専専攻科は本校を含めて**6**校となった。その他、専門学校や留学などが**4**種類有った。

高専創設時にはまだ無かった「**大学編入制度**」は、その時代、時代によって大きく状況が変わった。筆者在職時の記憶を基に、簡単な歴史を記しておくので、参考にされたい。

#### I 高専の出口一袋小路一

高専制度の創設目的には、企業技術者の養成が主であり、大学とは別の学制でスタートしたため、更に大学や大学院へという機会には配慮されて居なかった。しかし、日本の社会情勢や経済基盤の変化に伴い、大学進学を希望する高専生の存在が顕著となって来た。どうしても、大学への進学を希望する者は、大学入試を受けて1年生からの再スタートを強いられた。卒業後直ぐに受験したり企業に就職後に受験し直した例を含めて**4**、**5**例ほどの情報を個人的には聞いていた。

#### II 大学編入一黎明期一

高専創設から10年ほど経過した頃から、技術科学大学開設の構想や明大、日大などの私立大学での編入制度が始まり本校卒の例も有った。昭和50年3月の卒業生には、M科は東京工大、C科は東京農工大と広島大に、初の編入生が出現した。以後、室蘭工大、埼玉大等と受入れ大学も次第に増加した。

#### III 技術科学大学の時代

石油ショックのため数年遅れで、主に高専卒業生を対象とした「技術科学大学」が長岡と豊橋に開設され、本校では54年3月に豊橋、翌年に長岡に編入をした。開設当時は、**超が付く狭き門**で成績上位者のみに限定された。

#### IV 現在一広き門の時代一

文部省が文部科学省へと再編されるのと呼応するように、大学編入制度が一気に拡充され

はじめた。高学歴化や博士号取得者増大という時代の要請でもあった。その結果、殆どの国公立大学で編入が制度化された。理系のみではなく、文系も一部大学では編入可能となり恵まれた時代である。

以上を踏まえて、参考データを見ると高専卒業生にとって、大学編入に関しては非常に「広き門」であり、普通高校経由の進学の高専の難しさを考慮すれば、全く別世界と断言できる。

この12年間で、大学編入は、「憧れの技科大」離れが進み、九州内の近隣の大学に多く進学する傾向が顕著である。技科大は遠距離に位置するために、本校生が次第に敬遠する傾向にある。

学科別に、卒業生が最も多いのは、

**M科 長崎大学** , **E科 熊本大学**

**S科 九州工業大学** , **C科 広島大学**

であり、学科の専攻科目や本校教員と大学との関係が大きく影響している様だと推察している。

高専の専攻科の進学者数は就職状況の善し悪しに大きく左右されているようだ。この数年は、就職状況がやや好転していたので、専攻科への進学者数は不景気時代より少し減少している。昨年後期からの大不景気の襲来を考慮すると、今年度から進学者数が反転して増加するものと予想される。

また、ニートやフリーターといった言葉が流行した、平成10年前後では、本校でも、就職をしなかった若者の存在が、多くはないが顕著に存在していた。

#### 4. まとめ

卒業生の進路先のデータを集計したことで、卒業生の動向を容易に把握できるようになった。これまでは、なんとなく体験的に感じていた

「高専生は先輩の居る会社に行きたがる」

という傾向はデータの上でも確かめられた。

また今回の資料によって、「先輩の居る会社」を容易に検索しやすくなることができた。

「キャリアデザインへの第一歩」の冊子として、進路決定に関する情報を多くまとめたので、低学年時からのキャリア形成に、多少なりとも役に立つのではと、多少甘目の希望を持っている。

また、入社試験あるいは編入試験に対しての受験の準備方法や実地練習についての情報をの冊子等から出来るだけ多く取得した後で、教職員からの実践的な指導を受けられれば、より効果的に準備ができるのではないかと、期待をしている。

また、教職員が実践指導される場合に、この冊子を上手に活用することで、無駄な労力と時間の節約を実現出来れば、より幸いである。

今後、更にキャリア教育改善を進めたいと事業継続の希望は有るが、この問題は支援室の領域外の課題につき、学校の方針に委ねている。

#### 5. 付記

前述のように、文部科学省の現代GPの予算を下に遂行してきたが、平成22年3月で終了となる。キャリア教育支援の活動に従事する中で、キャリア教育の重要性と継続の必要性を痛感している。

現在の高専の制度では、予算面でも、人的な面でも全く不足しており、継続は非常に困難であろう。しかしながら、種々の雑務に追われている学科長や5年生担任の教員が、学生との直接的な面談指導により多くの時間を割けるような支援体制作りをし、学生が気楽に相談をできる「キャリアセンター」の必要性をあえて提言しておきたい。

#### 参考文献

- 1) 佐世保工業高等専門学校研究報告 第45号, pp.47 - 50, 2008
- 2) 卒業生の進路に関する資料  
2008,10 学内用資料として配布  
2009,10 発行予定, 学内配布
- 3) 佐世保高専生のための  
「キャリアデザインの第一歩」  
試作版,2008,10, 学内配付資料
- 4) 高専生のための  
「キャリアデザインの第一歩」  
第1版, 2009,8, 学内用配布資料と  
教育方法改善全国高専研究集会資料,8,2009

佐世保工業高等専門学校 過去12(1997~2008)年間の進路別の統計データ

平成 年度	機械工学科				電気工学科				電子制御工学科				物質工学科				全学科				入学	卒業															
	学級	就職	進学	未定	学級	就職	進学	未定	学級	就職	進学	未定	学級	就職	進学	未定	学級	就職	進学	未定																	
H08	34	20	58.8%	14	41.2%	0	0.0%	0	0.0%	40	19	47.5%	21	52.5%	0	0.0%	38	21	55.3%	17	44.7%	0	0.0%	143	78	54.5%	65	45.5%	0	0.0%	1992/4/1~1997/3/31						
H09	37	18	48.6%	17	45.9%	2	5.4%	33	20	60.6%	11	33.3%	2	6.1%	39	25	64.1%	14	35.9%	0	0.0%	31	12	38.7%	16	51.6%	3	9.7%	140	75	53.6%	58	41.4%	7	5.0%	1993/4/1~1998/3/31	
H10	33	16	48.5%	17	51.5%	0	0.0%	32	16	50.0%	16	50.0%	0	0.0%	37	26	70.3%	11	29.7%	0	0.0%	42	17	40.5%	22	52.4%	3	7.1%	144	77	53.5%	64	44.4%	3	2.1%	1994/4/1~1999/3/31	
H11	33	19	57.6%	14	42.4%	0	0.0%	36	21	58.3%	15	41.7%	0	0.0%	45	30	68.9%	15	31.1%	0	0.0%	33	14	42.4%	19	57.6%	0	0.0%	147	85	57.8%	62	42.2%	0	0.0%	1995/4/1~2000/3/31	
H12	39	19	48.7%	20	51.3%	0	0.0%	42	27	64.3%	15	35.7%	0	0.0%	43	24	55.8%	19	44.2%	0	0.0%	36	17	47.2%	19	52.8%	0	0.0%	160	89	55.6%	71	44.4%	0	0.0%	1996/4/1~2001/3/31	
H13	41	23	56.1%	18	43.9%	0	0.0%	37	27	73.0%	10	27.0%	0	0.0%	40	18	45.0%	22	55.0%	0	0.0%	36	8	22.2%	28	77.8%	0	0.0%	154	76	49.4%	78	50.6%	0	0.0%	1997/4/1~2002/3/31	
H14	38	19	50.0%	19	50.0%	0	0.0%	37	23	62.2%	14	37.8%	0	0.0%	43	25	58.1%	18	41.9%	0	0.0%	37	13	35.1%	24	64.9%	0	0.0%	155	80	51.6%	75	48.4%	0	0.0%	1998/4/1~2003/3/31	
H15	42	22	52.4%	20	47.6%	0	0.0%	45	24	53.3%	21	46.7%	0	0.0%	39	23	59.0%	16	41.0%	0	0.0%	45	16	35.6%	29	64.4%	0	0.0%	171	85	49.7%	86	50.3%	0	0.0%	1999/4/1~2004/3/31	
H16	40	25	62.5%	15	37.5%	0	0.0%	37	28	75.7%	9	24.3%	0	0.0%	46	19	41.3%	27	58.7%	0	0.0%	39	12	30.8%	27	69.2%	0	0.0%	162	84	51.9%	78	48.1%	0	0.0%	2000/4/1~2005/3/31	
H17	36	21	58.3%	15	41.7%	0	0.0%	38	22	57.9%	16	42.1%	0	0.0%	42	18	42.9%	23	54.8%	1	2.4%	42	16	38.1%	22	52.4%	0	0.0%	154	77	50.0%	76	49.4%	1	0.6%	2001/4/1~2006/3/31	
H18	40	25	62.5%	15	37.5%	0	0.0%	36	18	50.0%	18	50.0%	0	0.0%	44	30	68.2%	14	31.8%	0	0.0%	35	15	42.9%	20	57.1%	0	0.0%	155	88	56.8%	67	43.2%	0	0.0%	2002/4/1~2007/3/31	
H19	44	29	65.9%	14	31.8%	1	2.3%	36	18	50.0%	18	50.0%	0	0.0%	44	30	68.2%	14	31.8%	0	0.0%	35	15	42.9%	20	57.1%	0	0.0%	155	88	56.8%	67	43.2%	0	0.0%	2003/4/1~2008/3/31	
H20	43	29	67.4%	13	30.2%	1	2.3%	36	21	58.3%	15	41.7%	0	0.0%	44	26	63.6%	16	36.4%	0	0.0%	45	23	51.1%	22	48.9%	0	0.0%	168	101	60.1%	66	39.3%	1	0.6%	2004/4/1~2009/3/31	
	500	285	57.0%	211	42.2%	4	0.8%	476	283	59.5%	191	40.1%	2	0.4%	546	313	57.3%	230	42.1%	1	0.2%	490	199	40.6%	285	58.2%	6	1.2%	2008	1083	53.9%	913	45.5%	12	0.6%		



